



女優 酒井美紀さん:インドにて、JBIC、JICA、ワールド・ビジョン事業を視察

酒井 美紀さん

1978年静岡県出身。1995年、映画「Love Letter」で第19回日本アカデミー賞・新人俳優賞。1996年、フジテレビ「白線流し」で主役を務め、注目を集める。1997年、映画「愛する」では映画初主演、第21回山路ふみ子映画賞・新人賞・第10回日刊スポーツ新人賞受賞。同年、映画「誘拐」で第21回日本アカデミー賞優秀助演女優賞受賞。そのほか、「恋と花火と観覧車」「Juvenile」「富江re-birth」「精霊流し」など多数に出演。2007年よりワールド・ビジョン・ジャパンの親善大使に就任。

視察事業

デリー高速輸送システム建設事業(円借款)	首都デリー市に地下鉄を含む初めての大量高速輸送システムを建設し、交通混雑の緩和をめざす事業。デリー地下鉄に試乗、建設中の新高架線工事現場を視察。
カルナタカ州持続的森林資源管理・生物多様性保全事業(円借款)	地域住民の参加等を得て植林を実施するとともに、森林に依存する地域住民の生活改善に向けた職業訓練、マイクロ・ファイナンス等を実施し、森林の再生、地域住民の生活水準の向上をはかる事業。植林現場を視察後、受益者と意見交換。
ヤムナ川流域諸都市下水道等整備事業(円借款)	首都デリー市を含む流域諸都市において下水道・公衆トイレ等の整備、環境・衛生に関する啓発活動を実施し、深刻化するヤムナ川の水質汚濁負荷の軽減、住民の衛生環境改善をはかる事業。下水処理場、火葬場、公衆トイレ、公衆衛生キャンペーン、子どもたちへの環境教育を視察。
養蚕普及強化計画(JICA技術協力)	二化性養蚕技術の開発と二化性養蚕の普及をはかり、品質のよい二化性生糸の国内生産をめざす事業。養蚕農家、繭市場・繭品質テストセンター、製糸工場を視察。
スマトラ沖地震津波復興支援(ワールド・ビジョン・ジャパン支援)	2004年のスマトラ沖地震津波被災地において緊急援助、復興援助を実施する事業。漁民の定住型住居や日産チャイルド・ケア・センターを訪問。
マドラス地域開発プロジェクト(ワールド・ビジョン・ジャパン支援)	タミルナドゥ州の22スラムにおいて、医療・保健衛生、教育、住宅・経済基盤整備等を実施し、人々の生活環境改善、自立支援を実施する事業。スポンサー・チャイルド、小学校、自立支援グループ、子ども会での人々との交流、蠟燭・お香作りの現場を視察。

—TBS「世界ウルルン滞在記」など多くの番組で様々な国、人々とかかわっていらっしゃると思いますが、インドは初めて伺っています。インドの印象はいかがでしたか。

酒井 渡航前に随分色々なことを言われていたのですが(笑)、首都デリーは想像していたよりずっと整然としていてスムーズな印象です。一方、地方では、人、牛や馬、自転車、人力車、オートリキシャ、自動車、そしてさまざまな匂い、すべてがカレーのようにミックスされていて、何の隔たりもなく存在し、命が共存している様子に驚くと同時に、それがインドの魅力と感じました。



—今回の視察に参加されたきっかけをお聞かせください。

酒井 2年前、フジテレビ「世界がもし100人の村だったら3」の取材が、世界の貧困問題に目を向けるきっかけとなりました。フィリピンのごみの山で、貧困のどん底で生きる少女の生活を目の当たりにし、ショックで言葉も出ませんでした。自分で何かできないかと考えたときに、国際NGO「ワールド・ビジョン・ジャパン」(以下、WVJ)を知り、チャイルド・スポンサーシップに参加、ベトナムの子どもたちの支援を始めました。今回、普通の旅では行くことができないような場所で、現場では現実に何が起きているか、支援が人々にどのような影響を与え、人々がどのように感じているかを肌で感じたいと思い、今回の視察に参加しました。

—視察の印象はいかがでしたか。

酒井 JBICによる経済社会インフラ支援、JICAによる技術協力支援、WVJによる草の根的な支援がトータルで視察できたことは有益でした。今までは、子どもたちへの支援に関心を持っていましたが、その国自体が発展し、人々が収入や雇用を得て生活していく基盤となる経済社会インフラ整備支援の重要性がよくわかりました。また、こういった支援と、最下層の人々をゼロから1の状態にする生計向上・自立支援は、実際ギャップは大きいけれども、密接につながっていることを強く感じました。これらの支援を分断して実施するので

はなく、同時に“合わせて”実施し、よい循環を作っていくことが重要だとわかったことがとても大きいです。ODAとNGO支援がめざしているところは最終的には同じはず。一層うまく連携し、開発途上国の人々の役に立つとよいと思います。

—円借款事業の印象をお聞かせください。

酒井 デリーの人々が誇りとしている地下鉄では、工事現場での安全帽・靴着用などの安全対策、燃えにくい素材を使った座席、エスカレーター



「デリー高速輸送システム建設事業」を視察する酒井さん

にサリが巻き込まれない工夫、地下鉄からのアクセスの確保など、日本のノウハウを生かしたきめ細かい配慮がなされていること、さまざまな国の安くてよい技術に支えられたグローバルな地下鉄であることに感心しました。インフラを整備することに加えて、ソフト面での配慮が“合わさって”はじめて事業が機能することがよくわかりました。また、現地で活躍する日本人コンサルタントが、自らの技術を生かすだけでなく、乗車マナーの定着化など日本のよいところを広めたいという強い想いと情熱を持って仕事をしており、その熱意に感動しました。円借款の植林事業は、植樹した苗が10m育つのに8年かかるという地道なものです。森林管理組合がきちんと組織化され機能していること、住民自身が森林保護や環境保全の意識を持って植林を実施していること、女性達がローンを利用して牛や羊など代替収入源を得、自立していることが印象的でした。人々の輝く笑顔や、村の子どもたちが「教師になりたい」「医者になりたい」と、人の役にたつ仕事をしたいという志を強く持っている姿に、がんばろうという意気込みを感じ、自分もパワーをもらいました。この事業が他事業のモデルとなり、笑顔が次の笑顔へと、よい連鎖となっていくことを願っています。



養蚕事業の現場で繭を手

—そのほかに印象深かった事業は何でしょうか。

酒井 JICAの養蚕事業ですね。繭から生糸が作られるプロセス自体に感動しましたし、繭というのは全く無駄なく利用できる素材で、すべて製品化につながることも驚きました。新しい技術に挑戦し、成功したJICAファーマーの自信に満ちた様子も印象的でした。さらに拡大していこうという野望を持ち、楽しそうでしたよね。日本ではすでに廃れてしまった養蚕技術が、必要とされる場所で役立ち、地域住民の生計向上につながっている、これはお互い嬉しいことですよね。出荷のため収穫した繭を女性達が軒先ではいでいましたが、女性にとってよい仕事ですし、繭市場に持っていけば、すぐに現金収入となる点も魅力的だと思います。JICAの支援によって16年でここまでの成果を出せたことは素晴らしいと思いました。本事業は今年で終了ということでしたが、その後が大事だと思います。製糸機械の維持管理、蚕の病気予防など、持続性はインドの人々自身にかかっているので、頑張ってもらいたいですね。

—視察の中で、スラム、自立支援グループ、森林管理組合など多くの受益者と接しましたが、いかがでしたか。

酒井 支援した事業が、最終的に受益者にどのような効果をもたらしたかが重要だと思います。WVJが支援するスラムの子どもが「僕は、『自分達ではできる』と自信を持てるようになった」と話してくれました。支援が物理的なものだけでなく、子どもたちの心に変化をもたらし、成長したことがわかり、実りがあったなあとこちらも温かい気持ちになった瞬間でした。また、WVJが支援するスラムの学校の先生が、「原爆から復興した日本に学びたい」と熱意をもって話しかけてくれたことも、ビジョンを持ったリーダーが育ち、村に未来があることを感じ、心強かったです。ODAやWVJによる支援が、人々の意識改革を促し、自信、希望を育て、自分達の力で自立することにつながっていること、それが感動的でした。幸せそうな笑顔に大きな元気をもらい、自分も「幸せ度」をアップして、もっともっと笑顔が多い生活をしたいと思いました(笑)。交流を通じて、現地の人々の一生懸命にやっているその気持ちが十分に伝わってきて嬉しかったです。

—日本のODAについてどのような感想をもたれましたか。視察前後で見方が変わった点はありましたか。

酒井 正直、ODAはもっと政治的なものと思っていましたし、どのように人々に影響を及ぼしているのかわかりませんでした。日本にいれば、「ODAを供与した」という結果が先走り、受益者の言葉や気持ち、生活の変化がなかなか伝わってきません。今回実際に、まさに人々の生の声が聞けたのが嬉しかったです。また、現場をみて、日本人の力、技術、お金が現

地の人々の役に立ち、喜ばれていることを誇りに思いました。現地の援助関係者、養蚕事業に携わるJICA専門家や調整員、デリー地下鉄の日本人コンサルタントの生き生きとした表情、技術を提供するだけでなく、日本のいいところを広めたいという熱意、現地の人々と信頼関係を築き、一体となって活躍していること、地道に一步一步、インドのことを一生懸命考えて仕事をしていることなどが素晴らしいと思えました。

—日本のODAの課題や今後期待することがあるでしょうか。

酒井 先日、TBS「世界がもし100人の村だったら5」の取材でフィリピンのごみの山に住む少女と、2年ぶりに再会しました。政府の政策で家（ハード）は与えられていたものの、食べるものや仕事がない状況には変化がなく、生活の質は一向に向上しておらず、問題は何も解決していなかったのです。また、今回の視察では、成功例も見ましたが、不十分な維持管理や人々への啓蒙の不足によって事業が十分に機能していない話も聞きました。効果を十分に発現させるためには、経済の発展を支えるインフラ整備に加えて、人々の教育、啓蒙、維持管理トレーニング、自立のための技術の修得が必要です。人々の意識や心の変化なども伴ってこそ、支援がもっと生きると思います。そして、リーダーが育ち、人々が主体的に取り組み、自ら生きていくための力をつけ、応用し自分達で広めていくこと、それが事業の持続性につながるし、日本の支援が本当の意味で人々の役に立ったと言えるのではないのでしょうか。日本のODAもそれをめざそうとしているのは理解できましたが、インドの貧富の差を目にすると、まだまだ支援が末端の人々に行き渡っていないように感じます。そういった意味で、今回視察したWVJなどノウハウを持つNGOなどもっと協力し、「貧富の格差」を埋めていくことが大事だと思います。もちろん、言うのは簡単ですが、実際に実施するのは難しい。支援を行き渡らせることは不可能だし、予算は限られている中で、支援が大海の一滴であるようなもどかしさも感じます。だからこそ、開発途上国の人々自身が自力で国を良くしていく力をつけられる支援が重要なのではないのでしょうか。それから、大事なことは、途上国のニーズは何か、人々がどういう国にしたいと思っているかですよね。こちらの考えを押し付け、ただ大きなインフラを整備すればよいのではなく、ニーズをきちんと把握し、人々が本当に必要だと思っていることを支援すれば、大きな金額はいらないかもしれないし、同じ金額でも支援が一層生きるのではないのでしょうか。

—今回の視察を通じてどのようなことを日本人に伝えたいですか。

酒井 今回の視察や、これまでの30カ国以上の海外経験を通じて、多くを“学ぶ”と同時に“気づかされる”ことの多さに改めて驚きます。日本のことさえもまったく知らないなあ、もっと勉強しようと思ったり、日本のことを見直したり。開発途上国の現状を知ると、むしろ日本という国はすごく特別なんですね。日本で生きていく中でももちろん問題はありますが、世界の状況に気付き、ベーシックなところが満たされていることに感謝して生活すること、それを“意識する”ことが大事だと思います。自分も、WVJのスポンサーシップを始めてから、地球環境、貧困のことを日々心に留めておくため、日常生活でために電気を消すなど、ほんのちょっと工夫をし、意識を保つよう心がけています。貧困を根本から救うことは難しい。行き着くところ、個人レベルでは自分のできることをするしかないわけですが、日常の生活を営む中で、少しでも地球や貧困のことを考え、視点を変えて行動するだけで、随分違ってくると思います。日本人にもそうあってほしい。同じ地球の中に生きている一員であることに気づくことで、人を大切にできるし、地球みんなが幸せであってほしいという気持ちが自然に芽生えると思います。今後、自分ももっと多くを吸収し、社会に還元していきたい気持ちが一層強くなりました。

—今回のご経験を今後のご自身の活動にどのように生かしていけますか。

酒井 実際自分の目で見、耳で聞き、匂いを嗅ぎ、体感でき、すごく勉強になりましたし、現場に来て本当によかったと思います。自分の見たこと、感じたこと、支援が役立っていて、人々の笑顔を見てきたよということを、自分の言葉で日本のみなさんの心に響くように、伝え届けたいと思います。

